

若者の就業支援と 協同労働

藤井 智（文化学習協同ネットワーク）



文化学習協同ネットワークは特定非営利活動法人の法人格を持っています。30年ほど前の、地域の父母の教育要求から始まった塾作り運動が発端になっている教育NPOです。今ではその流れをくむ地域の学校以外のオルタナティブな学びの場としての「塾」の運動支援と、不登校の子たちのフリースペース「コスモ」の運営をしています。また、青年や学生を中心に編集委員会を作り『カンパネラ』という雑誌を発行しています。毎年秋には大規模な文化企画に取り組んで、今年は山田洋次監督の『15歳～学校 IV』をロードショウに先駆けて上映し、山田洋次監督に来ていただいてフリースペースの子と話をしたりもしました。スキー合宿やサマーキャンプにも取り組んでいます。

私は10代後半から20代の青年と接する機会の多いセクションで仕事をしています。不登校や高校中退、学校へ行っても競争社会の中で勝ち抜いていける子たちではない、そういう子たちが多い現場です。彼らの社会的自立というのが20代前半どう具体的になされていくのが、私の今考えているテーマです。

彼らの親世代は会社人間、仕事人間と言わ

れています。そういう親に自分の将来像を重ね合わせるのにはためらいを感じているようですが、同時にそれに変わるライフスタイルが作られてきていないように思います。

一つは暮らしのシーンと働く場が分離していて、帰ったら「疲れた」とか「風呂」「めし」「寝る」ではないけれど、そういう親父しか見えていない。生き生きと働いている父親を見ることもない。実際に働く年上の人を見ることがない中で、「ああこんな大人ステキだな」「ああいうのいいな」という憧れが育ちにくい状況があると思います。

二つ目には、家事労働の分担という意味でも、コミュニティの中でも、役割を発揮して誉められたり批判されたりする中で、自分の位置を確認していく作業も出来ていないと思います。前の教育学会長の大田堯先生は「子どもが失業状態だ」と表現しましたが、ほんとにそう思います。唯一彼らが自己表現できるのは、きれいな服を着てみたり、流行の最先端をいってみたり、他の子が知らない音楽を知っているとしゃべってみたりといった感じだと思います。そういった消費行動の中でかろうじて自分を表現しているのではないかと思えて

しまいます。

三つめに、現場社会が「おどし社会」ではないか、10数年間生きていた彼らが脅されたり叱咤されたりする中で生きていたのではないかということです。「ちゃんとやるんだよ」と最初に学校に行くとき言われますよね。「中学は厳しいんだよ」とか「そんなことで高校受験落ちちゃうよ」とか「そんなことでは社会で生きていけないよ」とか。なんでそんなに脅さなければいけないのか、社会ってそんなに恐ろしいものなんだろうかと思います。そういう脅しを受け続けている中っていると社会に対する「怖れ」ばかりがふくらんでしまいますよね。

このような自立しにくいシステム、自立するのが困難な社会に彼らは生きていたのではないかと思います。

自分が何していいかわからないというのが青年に共通の思いがあるような気がします。自分らしさを見つけていく、自分が何者かを見つけていくということは、他者との関係です。関係性の中で自分を見つけていくのですから、コミュニティの再生なしには自分らしさの発見、青年の自立支援は難しいのではないかと思います。

高校中退した18歳の青年が、「俺の老後はもうだめだ」と言うんです。両親は猛烈に働いていて、「自分たちはこんなに苦労して働いているんだから、老後は安泰だ。お前はだめじゃ」と言われ続けていて。何だか淋しいですよ。「老後」なんて言う前に、今の自分をつくっていくイメージも持たないで苦しい思いをしている彼らをどうしたらいいのか。

私は「大丈夫だよ、きっと一緒に生きてい

けるよ」とか「君だってそのままでもいいじゃない」というのを言葉だけでなく、リアリティを持って語れるようになるには、協同の働き方が現実社会の中で根付いて行く中でありえないんだろうと思っています。いま新自由主義が言われていますが、「自分で力をつけなさい、それなりの条件は行政も整備するけれど後は自分の責任だから、だめな人間は生きていく資格がないんだ」という中で生きていくのはしんどいですよね。絶えず勝ち続けることを求められ、絶えず自分を高めることを求められてしまう。

「もういいんだよ。君が生きていたそのことがそのまま素敵なことなんだよ」というメッセージを求めている彼らが、「今のお前はだめなんだよ」「もっともっと」と言われ続ける中で生きていけなくてはいけなければなら、確かに社会は怖いところなんですね。そういう「追い立ての論理」ではなくて、協同の働き方の中で人間への信頼だとか、将来への展望が育まれていくのではないかと思います。人と人が競争して争い合って経済活動をしていくのではなく、手をつなぎ合ったり、仕事を分かち合ったりしていくことが求められていると思います。

そんな思いで手を打ってみたのが「SCHOOL TO WORK」という講座です。「これからの働き方発見セミナー」というキャッチコピーで講座を開きました。今年の6月から7月にかけて全6回。あまりトップランナーのカッコいい人ではなくて、ちょっと前に行く先輩。「あ、あれくらいなら俺もできるかもしれない」というようなリアリティを持った、等身大の先輩に来てもらいました。食べ物の分野で働いた

